

## 南レバノンでのイスラエル軍駐留への抗議の高まり

ビラル・ガゼイ（レバノン人ジャーナリスト）著、脇浜義明訳、田中一弘補訳

Drop Site、2025年2月5日 \*脚注は訳注

今日、レバノン政府は、イスラエルが米国が仲介して成立した停戦協定を何度も破っていることを、国連安保理に訴えた。訴状は、停戦後もイスラエルが空爆や地上攻撃を繰り返し、住宅破壊、民間人やレバノン軍人の殺害、自宅へ帰る人への狙撃、軍撤退協定（それは1月26日に期限が切れたが）に違反して、イスラエル軍と戦車が南レバノンの村々に駐留していることなどを、詳しく述べている。

以下は、レバノン人のフリー・ジャーナリストのビラル・ガゼイが南レバノンの3か所、避難民が自分たちの村を占領して自分たちの入村を許可しないイスラエル軍に抗議して、村の前にテントをはって生活している3か所を取材したもの。－ シャリフ・アブデル・クードゥス。



南レバノンのクファルケラ村の避難住民は、昨年11月に停戦になったにもかかわらずイスラエルが居座って、自宅に戻ることを拒否されているので、イスラエル軍が駐留している自分たちの村の外で、テント生活している。Photo by Bilal Ghazeye.

先週クファルケラ村へ帰ろうとしている村人にイスラエル兵が発砲し、一人が死亡、15人が負傷したと、目撃者がドロップ・サイトの依頼で取材している私に語った。昨年11月に米国の仲介のレバノン停戦の一環として、イスラエル軍が60日以内に撤退することになっていたが、イスラエルはそれを無視して、いくつかの村や町に軍の駐留を続けた。クファルケラ村はそういう村の一つである。60日間という撤退期限が1月26日に終わったので、米国はそれを2月18日まで延長した。

村から追い出された人々は自分たちの村を占領しているイスラエル軍に抗議するために、村の外にテントを設営して、シットイン抗議を始めた。アブ・ラビア・ハムードは、イスラエル軍がクファルケラ村を攻撃し、村人を追い出し、村に駐屯してから1年2か月経った今も、村に戻ることができない。彼は数十人の村人といっしょに、村の入り口から数キロメートル離れた場所でテント生活している。テント村と村の間には有刺鉄線バリケードと戦車が村人の帰村を阻んでいる。

テント村からは、イスラエル軍戦車が村を潰している音や頭上を飛ぶドローンの音が聞こえる。「ひと月でもふた月でも、どれだけかかろうとテント村で頑張る」とハムードは語った。

1月26日、村へ帰る住民の群れにイスラエル軍が銃弾を浴びせ、少なくとも27人が死亡し、150人が負傷したと、レバノン保健省が発表した。避難民が各地で自分たちの村の前でテント生活を始めたのは、そのときからである。イスラエル軍との緊張したにらみ合いが続いている。

ハムードらのグループはイスラエル軍に攻撃され、今の位置、デイル・ミマスとカファルケラの交差点にレバノン国軍によって強制的に後退させられたのである。レバノン国軍もイスラエル軍が停戦協定に従って撤退するのを待っている。レバノン軍は監視塔を立てて、村人が占領された村の近づかないように見張っている。

昼間は数百世帯の人々が抗議のテント村へ集まる。食べ物やお茶を持ってきて、みんなで抗議のシュプレヒコールをやったり、民族主義的な歌を唄う。夜は抗議者の数は寒い気候に耐える体力のある男たちだけになる。このような抗議テント村がアル・テイバ村、フーラ村、アデイサ村、ヤルーン村、マイルス・アル・ジャバル村などの前に設営されている。

「イスラエル人が奪って破壊しているカファルケラ村は、私たちがこの抗議の闘いで命を落とすことがあっても、必ず取り返します」と、ハムードは、何人かの村人と共同生活しているテントの横で、私に語った。「これは政治とは関係ありません。土地と権利の問題です。私たちは家に帰りただけです。」

「私はシェルターや難民キャンプで生涯を終えたくありません」と、二人の子どもを持つ父親が私に語った。彼の家族は、戦争初期にベイルートへ避難し、そこの避難民シェルターにいる。「私は村に戻って村を再建したいので、ここへ来ました。一生を避難民として暮らしたくないのです。」

近くのテントでは、18歳のジャワド・シートが自分の村へ続く夜道をじっと見つめていた。「戦争になって、ぼくは家へ戻れなくなりました。最初は家族といっしょにベイルートへ逃げました。それからさらに北のレバノン山のアーレイへ避難しました。学業を続けることもできないし仕事を見つけることもできません。家から離れていて、何ができるでしょう？」と語ったが、彼の声は小さくなり、微かな作り笑顔となった。「村へ帰れたら、まず第一にしたいのは、瓦礫の下に埋もれている村人の遺体探しです。きちんと見つけてきちんと葬ります。」

イスラエルがレバノン戦争をエスカレートしたのは昨年9月、ヒズボラとの国境を挟んでの交戦を1年間続けた後である。ヒズボラはイスラエルがガザ・ジェノサイドを始めた翌日からロケットや大砲をイスラエル領へ撃ち込んで、パレスチナを支援した。イスラエルのレバノン戦争で4000人以上の人が死に、120万人以上の人が家を追われ、レバノンの南部と東部が広範囲に破壊された。国連開発計画によると、90,000を超える建築物 — 住宅、会社、農業施設、学校、水道施設等々 — がイスラエル軍の全国的爆撃で破壊または損傷した。ヒズボラもイスラエル軍に損害を与えた — 数十人のイスラエル兵が死亡、数百人が負傷、イスラエル内の町や軍事施設を攻撃して損傷を与え、イスラエル北部の入植者数万人を避難移住させた。

11月27日に発効した停戦協定では、イスラエルは南レバノンから軍を撤退させ、ヒズボラは戦士と武器をリタニ川の北へ移動させて、南レバノンでの軍事的プレゼンスをなくすことになった。一年間のイスラエルの猛攻撃で破壊された南レバノンには、レバノン国軍と国連軍が展開する手はずであった。

しかし、軍撤退期限の1月26日になっても、イスラエルは、ヒズボラが十分に撤退していないという口実で、軍を南レバノンの一部に駐留させると言った。レバノン政府はイスラエルの口実を嘘だと否定し、イスラエルに停戦協定を守れと要求した。この2か月の間にイスラエルは数百回も停戦協定を破り、ヒズボラが潜んでいるという口実で、南レバノンを攻撃した。

「昨年11月からの停戦期間も、今も、イスラエル軍は軍事行動をやめず、村や町を攻撃し、市民的インフラを破壊するなど、南レバノンで毎日破壊と殺害を繰り返している」と、国境なき医師団のレバノン緊急事態コーディネーターのフランソワ・ザンパリーニが、2月3日に声明を出した。

自宅へ戻ることができた避難民は数十万人いたが、彼らが戻った村や町は瓦礫の山であった。しかし、帰村できない人々も10万人以上いる。イスラエル軍の部隊と戦車が占領している村が8村あるからだ。



レバノン南部のヤルーン村郊外、イスラエル軍戦車から数メートル離れた場所に立つレバノン軍兵士。1月30日。写真：Bilal Ghazeye。

カファルケラの南40キロメートルのところにあるビント・ジュベイル地区では、ヤルーン村を追い出された村人数十人が毎日村へ続く道路に集まり、レバノン国旗とヒズボラの旗を振って、イスラエル軍の撤退を叫んでいる。彼らの背後には国連軍、イスラエル軍撤退の後にレバノン国軍といっしょに配置する取り決めになっている国連軍がいて、事態を見守っている。村人の前方にはレバノン国軍兵士がいて、イスラエル軍と対峙している。

背景に見えるヤルーン村はイスラエル軍によってズタズタに破壊されている。家屋が壊され、道路は瓦礫だらけである。住民がイスラエル軍撤退を叫ぶ中、ブルドーザーが動いて、木々をなぎ倒している。レバノン保健省の発表によれば、これまでに抗議の村人の少なくとも14人がイスラエル狙撃兵の3回にわたる発砲により負傷したという。

ヤルーン村人の初老女性フーレヤ・トホファは家に帰ろうとして10か月になる。「イスラエル人、出て行け！ここはあたしの家だ」と、彼女はイスラエル軍戦車とブルドーザーから数メートルの所に立って、叫んだ。「村の入り口に立つと、家が見えます。でも、見るたびに家が変わっています。毎日、あいつらは壊したものをさらに壊しているのです」と彼女は私に語った。

トホファ一家は去年3月に北のアラムーンに避難した。停戦になったので家へ帰ろうとした。先週にイスラエル軍撤退期限が切れたときに、一家は家に帰ろうとした。「あいつらはあたしたちを村に入れなかったのです。村人のあたしたちをですよ」とトホファは激しい口調で言った。さらに、彼女は怒りをイスラエル軍と戦おうとしないレバノン国軍に向けた。「本気で介入してくれるものが欲しいのです。あいつらを追い出す新しいレジスタンスが必要です。だって、イスラエルは抵抗しないと暴挙をやめないのですから。」

レバノン国軍は国内の宗派的分裂の中かろうじて舵取りをしてきたが、ヒズボラと全く対照的に、イスラエルとの直接対決を避けてきた。ヒズボラはイスラエルに対する共同戦線を形成している中東の国家や非国家の緩い抵抗軸の一つで、長年イスラエルと戦闘を行ってきた。



レバノン南部のドゥハイラ村にあるレバノンとイスラエルを隔てるセメントの国境の壁。1月30日撮影。写真：Bilal Ghazeye。

西方に、イスラエルの西ガリラヤにあるベドウィン村アラブ・アル・アラムシャと国境を挟んで向かい合っているレバノンの村ドゥハイラは、今やゴーストタウンである。アラブ・アル・アラムシャではモスクからお祈りの放送が流されるなど生活が続いているのに、ドゥハイラは廃墟で、家が破壊され、農地は荒らされ、かつて井戸があったところは単なる穴ぼこになっている。イスラエル軍は1月26日に、ドゥハイラ村を廃墟にして撤退した。多くの村人が自宅などを点検に帰ってきたが、もう手の施しようがないほど破壊され、付近のイスラエル兵から狙撃されたので、再び村を離れた。

1月30日イスラエル軍が国境を越えてまたドゥハイラに入り、かろうじて残っていた農地をブルドーザーで潰した。30代のドゥハイラ村のタバコ農民ジャワド・サレムがその光景を見つめて立っていた。「私のタバコ畑は一シーズンで1万ドル稼いでくれた。今や私は文無しだ。畑は穴ぼこだし、家は瓦礫に山だ」と彼は言った。

戦争勃発で彼は北へ避難し、地中海沿岸都市シドンで住んだが、停戦になったのでドゥハイラへ戻った。ドゥハイラは廃墟となり、イスラエル軍が住民を見ると発砲していた。彼も、他の住民と同じように、本当の停戦になることを、再建という遠い希望を抱いて、待っている。「私は戦争を望まない。しかし、敵は誰彼のお構いなしに殺そうとします」と彼は言った。